隠岐島前高校郷土部収録

海士町の民話から㉖

■再話・解説
酒井董美（山陰民俗学会会長、元隠岐島前高校郷土部顧問）

猿蟹合戦

語り手…木野谷タマさん（多井、明治19年生まれ）

とんとん昔があったげな。

猿と蟹があったげな。猿は柿の種を拾ったげな。蟹はにぎり飯を拾ったげな。猿が、

「蟹さん、蟹さん、おまやあ、そのにぎり飯は食べてしまぇやあ、すぐなくなるが、この柿は播いておけばいつも食べられっけに、なんと取り替えようだないか」てて言うで、取り替える都合にして、で、取り替えたら、猿はにぎり飯を食べてしまう。蟹はその種を播いて、

早く芽を出せ　柿の種
出さねば　鋏（はさみ）ではさみ切るぞ

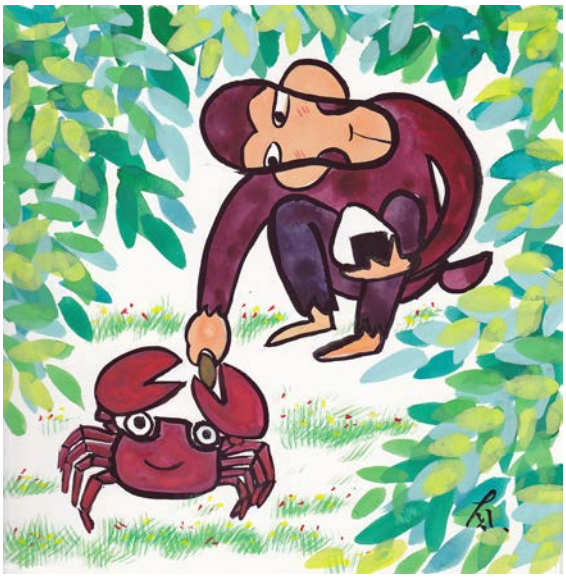
と言ったら、すぐに芽が出たげな。芽が出たら、また、

早く大きんなれ　柿の種
ならねば　鋏ではさみ切るぞ

と言ったら、ずんずんずんずんに柿が大きんなった。また、

早く実（み）がなれ　柿の種
ならねば　鋏ではさみ切るぞ

と言ったら、また、実がどんどんどんどんなるやになって、で、実がなって柿も熟したが、なんと木によう登ることができず、



イラスト／福本隆男（崎出身、三郷市在住）

「猿さん、猿さん、おまえと替いた柿の種、大きになってから実がなるやになったけに取って食べさせてくれ」といって蟹が頼んだら、

「はい、はい、わしが取ってあげえけん」てて言って、で、猿は柿の木に登って、自分一人（ふとり）食べて、蟹に取ってもくれましぇんだけん、

「猿さん、猿さん、わたしにも取ってくれえ」てて言った。そうしたら、

「おまやぁ、こっでも食べえ」てて言って、すぐ柿を蟹に投げつけて、蟹は甲に当たって怪我をして、泣いておったところ、そこへ玉子と昆布と臼（うし）と蜂と見舞いに来て、そで、そのわけを聞くと、

「こうこうこういうわけだ」てて蟹が言ったら、

「そんなことをするやなら、かたきを討ってやら」てて言って、そいかあ、かたき討ちする相談になって、で、玉子は火鉢の中に隠れちょる。そかぁ（それから）蜂はゼン棚に隠れて、昆布は台所に、臼は天井に、蟹は水桶（みずおけ）の中に隠れておったに、晩になって猿が帰って来て、

「ああ、寒（さぶ）い、寒（さぶ）かったなあ」てて言って、火鉢に火を起いて当たらとした。

そうしたら、玉子がポーンとはしれて、顔に火傷して、

「やれ、こらまあ火傷したわい」てて言って、水桶に顔をつきょうとしたら、蟹にはさまれて、

「やれ、こら」てて言って、起きてドタバタしたら、ゼン棚から蜂がきて、

ーこらまあ、持てのわいーと思って、駆け逃げようとしたら、け（つい）昆布で滑って、け、転んだら、そら（上）から臼が落ちてきて、とうと、猿は臼につぶされたっていうこと。

で、必ず、人を痛めたり、人に嘘をついたりすることはいけぬことだということを聞きましただ。その昔。

■収　録：昭和48年　8月31日
■聞き手：三原幸久（大阪外大助教授）
　　大阪外大女子学生、酒井董美

【解説】関　敬吾『日本昔話大成』では動物昔話の中の「猿蟹合戦」として、この話が収められている。猿をこらしめる仲間は変わった者もいるが、どなたもおなじみの話であろう。